

団地（密集家庭）に於ける母子保健の研究（第3報）

研究班長 副所長 内藤 寿七郎

I. 愛育病院の産科病歴カードによる考察

研究第1部 渡辺次郎

1. ま え が き

我々は昨年、藤沢団地の居住者、約800名について、母性保健の立場から調査を試みた。その成績は研究所紀要第2集に報告されているが、そこでは二つの重要な特徴が見出されたことを強調した。即ち第一は異常発生頻度が階層の高まりにつれて増加することであり、第二は母親学級、受胎調節、人工妊娠中絶、無痛分娩法、分娩施設等のような妊産婦の選択心理の働対象については、どの階層をとってみても、その関心度は同一傾向を示していることであった。

今回は以上の点に関して、都市中心部の団地住宅が如何なる反応を示すであろうかという点を追求しようと考

第1表 地区別分布
Table 1 Distribution by the Area

	公 団	其 他	計
東京区内	52	107	159
東京区外	9	1	10
神奈川	34	7	41
埼玉	10	0	10
千葉	10	0	10
其 他	0	2	2
計	115	117	232

第2表 調査対象の分布
Table 2 Distribution of the Examined Subjects (Women)

年 度 階	公 団						その他（マンション、コーポラス、 アパート、ビル）						総 計		
	38	39	40	41	42	小 計	38	39	40	41	42	小 計			
1	5	6	12	3	1	27	5	7	7	3 (2)	1	23 (2)	50 (2)		
2	3	6	10	6		25	7	8 (1)	2 (3)	5 (2)	1	23 (6)	48 (6)		
3	1	10	4	4	1	20	2 (2)	1	2 (2)	7 (2)		12 (6)	32 (6)		
4	5	9	9	4	2	29	1		1 (2)	4 (4)	4 (4)	6 (10)	35 (10)		
5		5	1	3	1	10	1 (1)	1 (1)	1 (1)		3	4 (3)	14 (3)		
6					(1)	(1)	(2)	(1)	(3)	(4)		(10)	(11)		
7	1					1	(1)			(1)	(1)	(3)	(3)		
8															
9				1		1			1 (1)	(1)		1 (2)	2 (2)		
10			(1)			(1)	(1)	(1)	(1)			(3)	(4)		
11							(2)			(1)		(3)	(3)		
計	15	36	36 (1)	21	5 (1)	113 (2)	16 (9)	16 (4)	13 (13)	19 (17)	5 (5)	69 (48)	182 (50)		
	この他に人工流産					10	125	この他に人工流産					5	122	247

() 内はエレベーターのある人員

えたが、諸種の都合により、この調査を短期間に行うことは無理であることが分り、それに代るものとして、愛育病院の受診カードから、公団住宅及びこれに準ずる住宅に居住する者を選び、可能な限りの項目について調査を行った。然し乍ら病歴カードは、このような目的のために作成されていないため、調査項目は前回に比し、大きく制限された。又対象者は予想外に少かった。

2. 調査対象

昭和38年1月より、昭和42年3月までの4年3ヶ月間に愛育病院産婦人科で受診分娩したものの約3,400名の中、公団住宅、マンション、コーポラス、ビル、アパート等に住んでいたもの232名、約7%（この他、人工妊娠中絶15名）に限った。居住地区を第1表に、階層別分布を第2表に示した。

3. 調査項目

調査項目は次のものに限定せざるを得なかった。1) 妊産婦の階層選択性 2) 異常発生頻度 3) 受診回数 4) 予定日と分娩日とのずれ 5) 出生時体重 6) 人工妊娠中絶。

4. 調査成績

1) 妊産婦の階層選択性 (第3, 4表)

本調査では妊産婦の81.5%が4階以下に居住している。また無昇降機群では4階以下居住者は91%に及んでいる。階層の高い程、妊産婦にとっては不便で、且つ妊娠障害ともなるので妊産婦が自衛的に選択を行うのであるとすれば興味ある問題であるが、公団等住宅の入居に選択の自由のない現状では確かなことは云えない。今後、入居選択の自由の高級マンション等と2~5階建の圧倒的に多い公団、公営住宅との別に集計出来れば、妊産婦に対する住宅対策の参考となろう。

昇降機の設備のない密集住宅で、5階以上11階に至る階層に住む妊産婦は17名(9%)いる。この人達はすべて身体的に恵まれているとは考えられず、日常生活の困難性が察せられる。(第4表)

2) 異常発生頻度

ここで異常とは妊産婦が、その経過中、医師の治療を必要とした疾病を指し、中等度以上のつわり、流産傾向(流産或は切迫流産を云う)、早産傾向(早産或は切迫早産を云う)妊娠中毒症、分娩産褥障害などを含む。

第3表 全体の異常頻度
Table 3 Frequency of Abnormalities

階	公 団			其 の 他			全 員		
	異常	正常	計	異常	正常	計	異常	正常	計
1	16 (59)	11 (41)	27	17 (68)	8 (32)	25	33 (63)	19 (37)	52
2	14 (56)	11 (44)	25	22 (76)	7 (24)	29	36 (67)	18 (33)	54
3	13 (65)	7 (35)	20	12 (67)	6 (33)	18	25 (66)	13 (34)	38
4	18 (62)	11 (38)	29	14 (88)	2 (12)	16	32 (71)	13 (29)	45
5	5 (50)	5 (50)	10	4 (57)	3 (43)	7	9 (53)	8 (47)	17
6	1 (100)		1	5 (50)	5 (50)	10	6 (55)	5 (45)	11
7	1 (100)		1	2 (67)	1 (33)	3	3 (75)	1 (25)	4
8									
9	1 (100)		1	2 (67)	1 (33)	3	3 (75)	1 (25)	4
10	1 (100)		1	1 (33)	2 (67)	3	2 (50)	2 (50)	4
11				2 (67)	1 (33)	3	2 (67)	1 (33)	3
計	70 (61)	45 (39)	115	81 (69)	36 (31)	117	151 (65)	81 (35)	232

註 人工流産15名は除く
frequency of the abnormality

第4表 無昇降機群の異常頻度
Table 4 Frequency of Abnormalities in the Group living in the Buildings without Elevators

階	公 団 及 び 其 他		
	異 常	正 常	計
1	31 (62)	19 (38)	50
2	32 (67)	16 (33)	48
3	21 (66)	11 (34)	32
4	24 (69)	11 (31)	35
5	8 (57)	6 (43)	14
6			
7	1 (100)		1
8			
9	2 (100)		2
10			
11			
計	119 (65)	63 (35)	182

第5表 有昇降機群の異常頻度
Table 5 Frequency of Abnormalities in the Group living in the Buildings with Elevators

階	公 団、マ ン シ ョ ン、コ ー ポ ラ ス、ア パ ー ト、ビ ル		
	異 常	正 常	計
1	2 (100)		2
2	4 (67)	2 (33)	6
3	4 (67)	2 (33)	6
4	8 (80)	2 (20)	10
5	1 (33)	2 (67)	3
6	6 (55)	5 (45)	11
7	2 (67)	1 (33)	3
8			
9	1 (50)	1 (50)	2
10	2 (50)	2 (50)	4
11	2 (67)	1 (33)	3
計	32 (64)	18 (36)	50

(註) 東京区外の2名を含む

A 概観：今回の高層住宅住居者の異常発生頻度は65%であった。昭和40年度の愛育病院41%、同年藤沢団地59%に比すれば高い。内容別では公団61%、その他（マンション、コーポラス、ビル、アパート等）69%で、公団以外の方が高い。

B 階層差：5階以上居住者の人数が少く、5階以上については、統計的意義は少ないと思われるが、1階63%、2階67%、3階66%、4階71%、7階75%、9階75%、とゆう数値は階層の高まりと共に異常発生が僅かではあるが増加することを示す。（第3表）

C 昇降機の有無：無昇降機群の異常発生傾向は全体のそれと全くと云ってよい程、符節が合っている。

有昇降機群の総数は50名、その各階層分布は何れも殆んど10名足らずなので、これを以て他を推測することは難しいが、

a. 4階以下の異常発生は、無昇降機群に比し、やや上廻っている。

b. 5階以上の異常発生は、無昇降機群より少い。

第6表 受診回数
Table 6 Frequency of the Examination

回数	人数	対象		東京都	
		全員	内訳 公団 其他	公団	其他
1					
2	1	1			
3	1		1		1
4	6	2	4		2
5	3	2	1		
6	1	1		1	
7	5	2	3		3
8	8	5	3	2	2
9	17	6	11	3	11
10	20	9	11	6	10
11	23	13	10	3	9
12	31	14	17	6	14
13	40	21	19	10	17
14	19	8	11	2	10
15	10	4	6	3	6
16	8	3	5	1	4
17	5	3	2		2
18	1	1			
19					
20					
計	199	95	104	37	91

(注) 其他……都下、千葉、埼玉、神奈川の諸県をさす

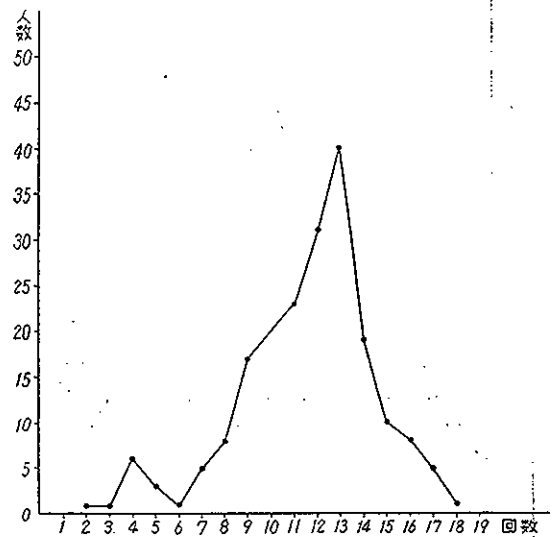
c. 以上a、bが相殺し合って、有昇降機群と無昇降機群の異常発生頻度はそれぞれ、64%と65%であり、全体（65%）と大差はない。（第4、5表）

3) 受診回数（第6表、第1、2、3図）

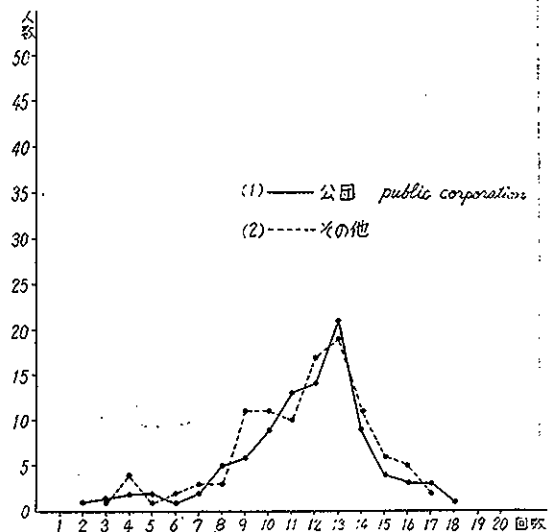
妊娠期間中、指示される受診回数は13回前後であるが、この事実を表及び図で示してみると概ね正規分布曲線に相当するものが得られた。13回受診者が一番多く、これを中心として回数の増減が左右に比較的急なカーブを画いていることは、受診率の高いことを思わせる。

更に図を見ると受診傾向は全体としても、東京都に限

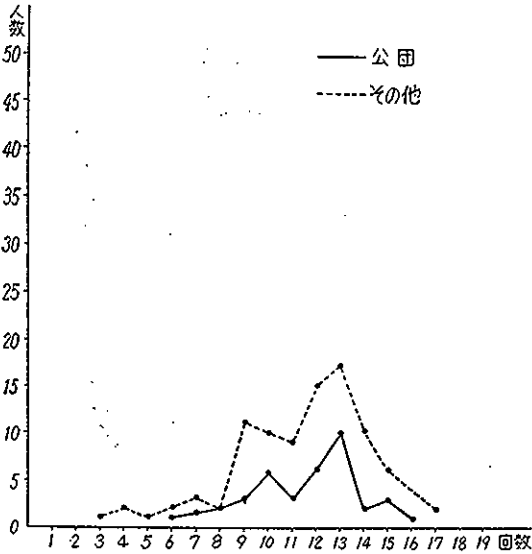
第1図 受診回数（1.総数——199名）
Fig. 1 Frequency of the examination



第2図 受診回数（2.公団その他別）（全対象者）
Fig. 2



第3図 受診回数 (3.東京都) (公団その他の別)
Fig. 3



第7表 出生時体重の平均値 (各階層別)
Table 7 The Average of Birth Weight on Each Floor

階	住居住宅		公団外			平均
	公団	公団外	マンション	コーポラス	その他	
1	3,142 (25)	3,276 (22)	3,222 (3)	3,499 (4)	3,218 (15)	3,204
2	3,207 (24)	3,104 (26)	2,920 (8)	2,802 (3)	3,140 (15)	3,153
3	3,335 (14)	3,232 (16)	3,247 (3)	3,277 (5)	3,151 (8)	3,283
4	2,814 (25)	3,187 (11)	3,443 (2)	2,957 (3)	3,216 (6)	2,928
5	3,207 (9)	3,223 (6)	3,503 (1)	3,130 (2)	3,168 (3)	3,213
6	3,560 (1)	3,265 (9)	3,060 (3)	3,308 (3)	3,370 (3)	3,295
7	3,710 (1)	3,040 (3)	3,135 (1)	2,565 (1)	3,420 (1)	3,208
8		3,335 (1)			3,335 (1)	3,335
9		3,010 (1)		3,010 (1)		3,010
10	3,300 (1)	3,257 (3)			3,257 (3)	3,268
11		3,258 (3)			3,258 (3)	3,260
平均	3,120 (100)	3,201 (101)				3,161

(註) () 内は人数, 単位はグラム

第8表 予定日との「ずれ」
Table 8 Discrepancy of the Expected Date

階	昭和					公 団					マ ン シ ョ ン					コ ー ポ					ア ー ト ・ ビ ル				
	38	39	40	41	42	38	39	40	41	42	38	39	40	41	42	38	39	40	41	42	38	39	40	41	42
1	-0.6 (5)	-2.5 (6)	-3.3 (11)	2.5 (4)	-5 (1)				0 (1)	-4 (1)					-3 (1)	11 (1)	6 (1)			-2.0 (5)	1.3 (4)	-0.3 (4)	-2.5 (2)		
2	-3.3 (3)	5.8 (6)	-0.7 (9)	4.6 (5)				-4 (5)	-25.5 (2)	-7 (1)					2.7 (3)			5.6 (6)	3.3 (3)	0 (3)	-2.5 (2)		6 (1)		
3		1.9 (8)	-3.3 (3)	8 (1)				-2 (1)		9.5 (2)					0.7 (3)	-2 (1)	0 (1)	11 (1)	9 (1)			0.5 (4)			
4	-4.7 (2)	-3.3 (8)	-5.3 (9)	-10.5 (2)	-3.5 (2)	5 (1)			7 (1)						-30 (1)	-12 (1)	-6 (1)	-16 (1)			2 (1)	-0.8 (4)	-8 (1)		
5		6 (4)	4 (1)	-3 (1)										-9 (1)		5 (1)		-2 (1)	1.5 (2)			-5 (1)	-6 (1)		
6					-3 (1)				-8 (1)	3 (1)					-1 (1)	-2 (2)					13 (1)				
7														11 (1)			-16 (1)								
8																									
9																			11 (1)						
10																				-10 (1)	-12 (1)				
11																							11 (1)		
人 員	10	32	33	13	4	2	5	5	5	3	0	1	7	9	2	21	10	10	14	3					

() は人数, - は予定日前, + は予定日超過
() Number, - Before Expected Date, + Over Expected Date

ってみても、公団とその他の間に差のないことが分る。

4) 出生児体重

全体の平均体重は 3,161 g。各種住宅、各階層に於て殆んどが平均体重以上で、その間に特徴ある差はない。

（第7表）

5) 予定日と分娩日との「ずれ」

正期産とは予定日前2週間以内及び予定日後2週間以内に行われた分娩を云うが、今回の調査では各種住宅、各階層共に殆んどが正期産の範囲内にあった。（第8表）

6) 人工妊娠中絶

昭和38年1月より昭和42年3月までの4年3カ月間に於て、公団は10名で8%、その他は5名で4.1%、従て全体では15名、6.1%である。これは前回調査の藤沢団地より遙かに少い。但し後者の統計は結婚以後の総計であり、前者に対する正しい対照とはいえない。

5. 考 案

1) 団地住民の母性保健研究の一環として、我々は最近3年間、3回に亘り妊娠分娩産褥について調査を行った。その際、各集団の母性保健の状態を分析し比較する上で、異常発生頻度を指標とすることが大変有効であることを知った。この方法は今までの文献には見当らず、今後集団調査の際、大いに活用して頂きたい。

2) 今回の調査は、主として東京を中心として行われたが、異常発生頻度は65%であった。一般に妊娠分娩産褥は生理的なものとして軽視される傾向にある。家庭によっては悪阻を生理的なものと見なして妊婦を酷使し死亡に至らしめる場合もある。この意味から、妊娠分娩産褥には異常発生が意外に多いことを再認識すべきである。

前回の調査は東京に比較的近い地方都市である藤沢団地について行われた。ここの異常発生頻度は59%であった。今回の調査に限って両者を比較してみると東京の方が異常発生頻度が高い。東京の団地の方が、一見あらゆる面で恵まれているように見え乍ら、このような結果をもたらしているのは何故であろうか。過密都市には諸種の公害を含み、精神身体的に保健上の問題が多いが、これ等に関連したストレスによるものであろうか。今後慎重な検討が必要である。

3) 昇降機の有無は今回の調査では、異常発生頻度に余り影響がないように見受けられた。然し、これは昇降機群の人数が少ないので何とも云えぬ。9階もの高層住宅に昇降機のないのは普通の人間にとっても大きな負担であろう。密集高層住宅では昇降機のみならず解決されねばならぬ問題が他に多数あるように思われる。

4) 妊産婦が階層の低い方に集中する傾向にあるよう

に見えることは興味深い。もし一般に住居の選択が自由に出来るようになって、妊産婦が階層の高い方から低い方に移転するについては人間関係の上で、かなりの困難に直面するのではないだろうか。この一点だけからも昇降機は是非とも必要である。

6. ま と め

我々は、今回、東京の高層密集住宅に於ける母性保健の状態を研究した。この目的を果すため、我々は愛育病院産婦人科の病歴カードを活用した。この病院は、最近4年間で約3,400名の妊産婦を取扱った。そして、この中から、我々は上記の目的に沿うもの232例（この他に人工妊娠中絶15名あり）を選んだ。この研究により、我々は次のような興味ある事実を報告することが出来る。

1) 異常発生頻度は全体として65%である。この事実は妊娠分娩産褥についての、これまでの安易な考えを改めさせるのに充分である。

2) 無昇降機群（182名）の異常発生頻度は全体のそれと等しく65%である。この群の異常発生頻度は階層の高さに従て増加する傾向にある。この事実は階段を使わねばならない生活環境の悪影響によるものと思われる。

3) 無昇降機群で、妊産婦が階層の低い方に多く居住していることは興味深い。然し妊産婦が自由に低階層を選択することが困難な事情からも昇降機を必要とする。

4) 有昇降機群（50名）の異常発生頻度は64%である。この頻度は全体及び無昇降機群のそれに略等しい。有昇降機群では異常発生頻度に階層差が見られない。

5階以上について、有昇降機群と無昇降機群とを比較すると、有昇降機群の方が異常発生頻度が少い。従って階層の高まりに応じて昇降機の必要が熱望される。

5) 今回調査の東京の場合、異常発生頻度は前回調査の地方都市（神奈川県藤沢市）より6%も高い。これは公害（交通混雑、騒音、煤煙等々）や人口過密によるストレスによるものであろうか。

6) 受診回数は公団群とその他の群とで差はなく13回前後が大部分であり、これは妊産婦が病院専門医の指導を評価しているものといえよう。

7) 出生時体重の平均は3,161 gで、各種住宅、各階層に大差はない。

8) 予定日と分娩日との「ずれ」は殆んどが正常の範囲内である。

9) 人工妊娠中絶は4年間で247名の中15名が行ったのみである。これは家族計画の指導の宜ろしさを物語る。

II. 団地における乳幼児の食生活について (3)

研究第4部 武藤静子・山内 愛

1. 目 的

近年3才児検診その他で3才児に対する関心が高まり、各方面から3才児に関する研究が進められている。

たまたま昭和41年に実施したF団地乳幼児の全数調査の中に109名の3才児を含むので、都内南部地区一保健所で実施中の3才児検診に便乗して非団地における3才児の食生活調査成績を得、両群の比較を試みた。

2. 方 法

団地対象一神奈川県F市郊外の一巨大団地の3才児全数109名、団地の性格、環境については前報で詳述した。

対照一東京都南部地区(中小工場地帯)のK保健所に於ける3才児検診に来所したものの中から任意抽出された非団地の3才児100名。

調査方法一団地における調査方法は第1報及び第2報に詳述したので略述する。調査時期は昭和41年2月～3月、幼児のいる全家族を栄養研究員が訪問し、食事歴、食習慣、食事法、前日摂取されたすべての食物等について母親から、ききとり調査を行なった。

第1表 子供の食事の時刻
Table 1 Meal Time of the Children.

朝				昼				夜			
時刻	団	地	対 照	時刻	団	地	対 照	時刻	団	地	対 照
7 h 以前	1	1.2	2 2.0	12 h 以前	0	0	4 4.0	6 h 以前	4	5.5	3 3.0
7～8 h	20	25.8	59 59.0	12～1 h	49	68.0	86 86.0	6～7 h	27	37.0	68 68.0
8～9 h	32	41.0	24 24.0	1 h 以後	23	32.0	9 9.0	7～8 h	32	43.8	24 24.0
9～10 h	21	27.0	9 9.0					8 h 以後	10	13.7	1 1.0
10 h 以後	4	5.0	1 1.0								
抜 き			5 5.0				1 1.0				4 4.0
計	78	100.0	100 100.0		72	100.0	100 100.0				
記入なし	31				37				73	100.0	100 100.0

夕食は団地では18～19時が37%、19～20時43.8%、20時以後13.7%と朝食と同様比較的広範囲の分布を示しているのに対し、対照では68%の家庭が18～19時に夕食を与え、20時以後のものは1%にすぎなかった。

1カ月後に体重、身長測定、小児科医による健康診断が行なわれたが、これに参加したのは53名であった。

対照については昭和42年8月～9月、同研究員がK保健所に赴き、3才児検診に子供と共に来所した母親に面接し、団地と同一調査用紙を用い、ききとり調査を行なった。

3. 成 績

a. 子供の食事時刻一団地の子供の朝食時刻はその大部分が7～8時、8～9時、9～10時に分布し、そのピークは8～9時にみられる。

対照では7～8時、8～9時の間に大部分の朝食は終り、ピークは7～8時で団地より1時間早い。又少数例ながら7時前の朝食、10時以後の朝食は団地、対照の両者にみられたが、特に団地では4例に10時すぎの朝食がみられた。又対照に朝食抜きの子供が5例みられたが、これはおめざに牛乳、菓子など少量たべて食卓に就かなかったものである。

昼食は団地の子供の約2/3が12～13時の間に、残りの1/3が13時以後にとっているが、対照児の大部分は12～13時の間に昼食をすませている。

また対照に3例の食事抜きの子供がみられたが、これは夕食をたべずにねてしまったものである。

3才児の食事として好ましい時刻配置はどのようなものになるか、興味ある問題ではあるが、これに関した研

究は非常に少い。

今回の調査では団地の3才児の食事時刻は都内南部地区家庭の子供より三食とも多少おそめではあるが、大体に於て一般の日本の家庭にみられる範囲内で、あまり重大な相異はないように思う。ただいずれにしても、例数は少ないが、10時すぎの朝食、20時以後の夕食などが対照児の場合よりも多くみられ、これらについてはやはり何等かの考慮が払われる必要があるように思われる。勿論子供の食事時刻は起床や就床の時刻、間食の挿入の仕

方、家族全体の生活設計なども考え合わせて個々に決められるべきものであろう。従って子供の最適食事時刻はそう簡単に律しきれないが、3才児の身心の発達過程や保健衛生を考える時、自ずから適度の限界が生ずるのではないだろうか。

b. 食事環境—朝食を父親と一緒にとれる家庭は大体全生活に亘ってきまりのある家庭ではないかと考え、その点に重点をおいて朝食についてみると第2表のよう団地では父親と一緒に朝食をとるものは全体の4/5にすぎ

第2表 食 事 環 境
Table 2 The Enviroment of Meal Time

	計		行儀よくたべた				遊びながら				テレビ見ながら				記入なし					
	団地		対照		団地		対照		団地		対照		団地		対照					
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%				
父 親 も 一 緒	31	28.3	73	73.0	14	45.0	39	53.5	5	16.1	24	32.9	5	16.1	33	45.0	7	22.6	2	2.7
父親以外のものと一緒	54	49.6	18	18.0	19	35.2	5	27.8	15	27.9	10	55.7	12	22.1	12	66.6	8	14.8	0	0
一 人 で	16	14.8	3	3.0	8	50.0	0	0	3	18.7	1	33.3	4	25.0	2	66.0	1	6.2	0	0
近所又は親類で	8	7.3	1	1.0	3		1		0	0	0		3	0			2		0	
食 事 抜 き	0		5	5.0	0				0				0				0			
計	109		100		44		45		23		35		24		47		18		2	

ないが、対照では1/5近くのもの父親と食事をともにしていた。又団地では一人で朝食をとるものもかなり多く、約1/3がこれに属していた。

食事の時の子供の態度について、母親が「行儀がよい」というものは団地、対照何れも半数、残りは「遊びながら」「テレビを見ながら」など、この年齢特有の発達課程を食事の時にも示している。「行儀よくたべる。」は団地、対照とも父親と一緒に朝食をとるグループに多少高率にみられ、食事に父親の加わる事の好ましさの一面を示しているように思われる。

対照群では昼食にさえも父親が帰宅する家庭のあることを考え合わせ、父親の通勤距離の問題がこのような観点からも考えられてよいように思われた。

c. 食事についての栄養学的検討—調査前日に摂取された食事内容について、前報で紹介したような方法を用いて栄養面からの検討を加えた。即ち食品を栄養的地域から ①穀群:穀類・芋類 ②蛋群:乳・卵・肉・魚等の蛋白性食品 ③菜群:野菜・果実等の無機質・ビタミンに富んだ食品 ④脂群:脂肪に富む食品の4群に分類し、食事毎にこれらの組合せがどのようになっているかを調べた。その結果は第3表のようである。一回の食事に穀・蛋・菜・脂の4つが組合されたものを一応質的

にバランスのとれた食事とするとこのタイプは対照にくらべ団地に著るしく多い。対照ではこの組合せが全食事の23%だったのに対し、団地では41.3%を占めていた。またどちらも夕食に、この4群組合せとが多く、殊に団地では過半数がこれに属した。穀・蛋・菜・脂の中、いずれか1つを欠いた3つの組合せ(例えば飯と魚とつけもの)は一応改善の食事と考えられるが、これは総体として最も普遍的な食事と前者では全体の41.3%、後者では33%がこれに属する。この3群組合せの中では両者とも特に脂群抜きのものも多く、日本人の食生活の特質(長短何れかは速やかに判じ難いが)がここにも現れているように思われる。次には菜群抜きが多くこれは野菜類が子供にあまり好まれない一因があるかも知れない。間食などに果物が用いられていれば食事に菜群抜きの欠陥は一応是正されるであろう。

4つの中の2つの組合せ(例えば飯と卵、あるいはパンとバター)は栄養的にバランスを著るしく欠いた食事とみられるが、これは対照に著るしく多く、殊に朝食と昼食の約半数はこの2群の組合せがあった。しかし団地にも皆無ではなく、朝食と昼食は約1/5がこの組合せであり、夕食にもわずかではあるがみられた。この評価法は栄養バランスの量の面が考慮されていないので、評価法

第3表 毎食の食品の組合せ

Table 3 Combination of Foods Group that Children took Every Day

[]は欠除した群

	種 別 バランス	朝		昼		夜		計	
		団 地	対 照	団 地	対 照	団 地	対 照	団 地	対 照
	調 査 数	109	100	109	100	109	100	327	300
4 群 組合せ	穀群・蛋群・菜群・脂群	29.6	5.0	39.4	17.0	55.0	47.0	41.3	23.0
3 群 組合せ	穀・蛋・菜・[脂]	32.0	28.0	24.8	16.0	24.8	26.0	27.2	23.3
	穀・蛋・[菜]・脂	16.5	8.0	11.0	8.0	0.9	3.0	9.4	6.4
	穀・[蛋]・菜・脂	0	2.0	2.7	4.0	0.9	0	1.3	2.0
	[穀]・蛋・菜・脂	0.9	0	0.9	0	8.3	4.0	3.3	1.3
	小 計	49.4	38.0	39.4	28.0	34.9	33.0	41.3	33.0
2 群 組合せ	穀・蛋・[菜]・[脂]	14.7	35.0	12.8	33.0	5.6	10.0	11.0	26.0
	穀・[蛋]・菜・[脂]	1.8	14.0	3.9	12.0	0.9	5.0	2.1	10.3
	[穀]・蛋・菜・[脂]	1.8	1.0	0	0	0.9	0	0.9	0.3
	穀・[蛋]・[菜]・脂	1.8	0	1.8	3.0	0	0	1.3	1.0
	小 計	20.1	50.0	18.5	48.0	7.4	15.0	15.3	37.6
単 群	穀・[蛋]・[菜]・[脂]	0.9	2.0	0.9	4.0	0.9	1.0	0.9	1.7
	[穀]・蛋・[菜]・[脂]				1.0	1.8	1.0	0.6	1.3
	[穀]・[蛋]・菜・[脂]			0.9				0.3	0
	小 計	0.9	2.0	1.8	5.0	2.7	2.0	1.8	3.0
保 育 園 給 食				0.9	2.0			0.3	0.7
食 事 抜 き			5.0			3.0		2.7	

として完璧なものではないが、摂取栄養の大勢を比較的簡単に把握するには便利である。これによって団地及び対照の3才児の食事を比較すると団地の方がはるかにすぐれた栄養のとり方であった。しかし改善の余地は尚相当残されている。

勿論調査は僅か1日の食事についてであったのでこれをもって全体を推測することは必ずしも妥当ではないかも知れない。しかし後述する身長、体重の測定成績と合わせ考える時、これらの食事評価の成績は一面の真実を伝えるもののように思われる。

d. 食事に関する問題

食欲についてみると第4表のようで「よくたべる」は対照にくらべて団地に少なく、また「まあまあというところ」や「むらがある」の多いことが目立つ。「あまりたべない」は多少対照に多いが、全体として団地児に食

第4表 食事に関する問題

Table 4 Problems concerning the Diet

食 欲	団 地		対 照	
	実数	%	実数	%
よくたべる	30	27.5	43	43.0
まあまあという処	29	26.6	13	13.0
あまり食べない	23	21.1	29	29.0
非常に少食	7	6.5	6	6.0
むらがある	20	18.3	7	7.0
計	109		100	

欲の少い印象をうける。

しかしこれには母親の主観の問題もあり、実際の食事

摂取量とどの程度、相関するか疑問がもたれる。

食事について困っている問題として団地側では「落ついて食事をしない」「テレビを見ながら食事をする」が高率に (それぞれ 25.2%、33.3%)、これに対し対照は 14%、1.6%あげられており、又「問題なし」は団地 38.3% に対し、対照は 73.5% であった。これらの相異

は、3才児という子供の特性から考えると実際の相異というより、むしろ両群の母親の問題意識の相異にもとずくものではないかと思われる。両者の母親それぞれに対し、育児の正しい在り方を指導教育することが必要なのではあるまいか。

「子供に食べさせたくないが、子供がほしがる食品」

第5表 たべさせたくないがほしがる食品

Table 5 Foods that the children like but their mother does not want them to eat

分 類	内 容	団 地 (109)		対 照 (100)	
		実数	%	実数	%
チョコレート・アメ類	チョコレート、アメ、ドロップ、キャンデー、キャラメル	67	61.3	32	32.0
甘いものその他菓子類	和菓子、せんべい、あんもの、アイスクリーム	20	18.3	8	8.0
ジュース類	ジュース、コココーラ、乳酸飲料	4	3.7	10	10.0
	即席食品、肉まん、いか、たこ、刺身	5	4.6	3	3.0
香辛料、刺激性のもの	カレー	4	3.7	3	3.0
興奮性飲料	紅茶、コーヒー	6	5.5	1	1.0
着色剤の入ったもの		6	5.5	4	4.0
辛いもの	漬物、酒のおつまみ、塩辛、うに	5	4.6	1	1.0
発疹しやすいもの	チーズ、バター、卵、牛乳	1	0.9		
アイスキャンデー、アイスクリーム		0		2	2.0
その他	海苔、みそ汁をかけた御飯	1	0.9		
計		119		64	64.0
なし		36	32.0	45	45.0

としてあげられている食品の種類及びその頻度は第5表のようで、1、2の例外を除いて団地側にその頻度が高く、殊にチョコレート、あめ類については対照32%に対し、団地半数以上即ち61.3%を示し、コーヒーや紅茶などの興奮性飲料、漬物、塩辛などの塩辛いものも多少団地に多かった。また「子供にたべさせたいがたべがらない食品」としてはかなり広範囲の食品があげられており、これも多少団地側に高く、殊にレバー、生野菜などは対照では3%のものがこれをあげているにすぎないのに、団地では20%のものがあげている。これらも母親の問題意識の相異に帰せられる面が少なくないであろう。

e. 身体測定成績

対象は何れも一応健康な子供達で臨時的に栄養疾患をもたなかった。身長及び体重測定値を昭和39年度国民栄養調査成績と比較した結果は第7表のようになる。団地では体重、身長ともに大に属するものが対照にくらべて

著るしく多く、小に属するものが少ない。これらは少くともその1部は両グループにおける食生活殊に、栄養的配慮の相異に帰せられるものではなかろうか。

4. 総合的結論

昭和41年2~3月に神奈川県F団地で実施した3才児109名の食生活に関する調査成績を昭和42年8月~9月東京都南部地区K保健所管内の3才児100名についての調査成績と比較した。何れも熟練した栄養研究員が母親に面接して得た資料である。

F団地は大部分がホワイトカラー、都南部地区はブルーカラーとホワイトカラーが約半々、家族構成は両者近似しており、殆んど核家族である。

子供の食事時刻は朝昼夕三食とも対照が団地よりやや早く殊に団地側には10時以後の朝食、20時以後の夕食などが数例づつみられた。

第8表 家庭の状況
Table 8 Circumstances of their Family

a. 家庭の職業

Father's Occupation

職業	団地		対照	
	実数	%	実数	%
専門技術	5	4.6	16	16.0
管理職	1	0.9	1	1.0
ホワイトカラー	96	88.1	41	41.0
ブルーカラー			29	29.0
小企業主	1	0.9	12	12.0
家族従業者			1	1.0
記入なし	1	0.9		
回答なし	5	4.6		
計	109	100.0	100	100.0

b. 家族の人数

Number of the Family Members

家族人数	団地		対照	
	実数	%	実数	%
2人	0	0	3	3.0
3	45	41.1	33	33.0
4	54	49.6	41	41.0
5	4	3.8	12	12.0
6	1	0.9	6	6.0
7			1	1.0
8			2	2.0
9			2	2.0
回答なし	5	4.6		
計	109	100.0	100	100.0

c. 子供の人数

Number of the Child

子供の数	団地		対照	
	実数	%	実数	%
1人	48	44.0	40	40.0
2	52	47.6	52	52.0
3	4	3.8	7	7.0
4			1	1.0
5				
回答なし	5	4.6		
計	109	100.0	100	100.0

d. 父母の年齢

Parents' Age

年齢	父				母			
	団地	対照	団地	対照	団地	対照	団地	対照
20才代	17	17	(%) 15.5	(%) 17.0	48	49	(%) 44.0	(%) 49.0
30才代	85	70	78.1	70.0	54	49	49.6	49.0
40才代	2	11	1.8	11.0	2	1	1.8	1.0
父なし		1		1.0		0		0
記入なし		1		1.0		1		1.0
回答なし	5		4.6		5		4.6	
計	109	100	100.0	100.0	109	100	100.0	100.0

○謝辞

今回の調査に当り東京都桃谷保健所長 宇留野勝正博士、及び前愛育研究所栄養部員、長沼時衛氏から惜しめない御協力を得た事を付記し、ここに深謝の意を表します。

Ⅲ 子どもの養育面からみた団地の実体

研究第8部 星 美智子・湯川 礼子

1. 目 的

「団地」がひとつの社会現象として浮きぼりにされてから、すでに10年が経過している。そして、いまなお「団地」は増設途上にある。激増した団地への行政的な対策、さらに新設団地への施策をすすめるためにも、「団地」の実態を究明してみる時期にきていると思う。われわれは、一昨年度、母子関係について一般家庭と団地の比較研究を実験的におこない、昨年度は設立2年後の一団地について、子どもの外あそびを中心に調査をおこなった。本年度は、設立後10年になろうとする団地を対象とし、この長い期間における団地生活のなかで、子どもの養育という面からどのような問題が提起されているかを明らかにすることが研究の目的である。

2. 方 法

(1) 対 象

東京都武蔵野市緑町公団住宅の世帯者住宅全戸、31棟829戸を対象とする。なお、当団地は、この世帯者住宅の他に単身者住宅190戸をもつ中規模の団地であり、設立は1957年11月である。

対照群として、藤沢団地の昨年度調査結果をとりあげた。藤沢団地は神奈川県藤沢市郊外にあり、1963年設立、43棟1,140戸（内7棟は分譲住宅）である。緑町団地と藤沢団地は、規模、東京都心からの距離においてほぼ同じといえ、設立時期のみ異なり、古い団地と新しい団地を対照するのに適している。

(2) 手 続 き

(1) 調査は、各戸を訪問して調査意図を説明して調査用紙を手渡し、封をした記入用紙を回収することとする。

(2) 当団地を学区内とする大野田小学校の4年生（団地で誕生した最年長児）を対象に「団地について」の作文を書かせる。

(3) 調 査 内 容

(1) 昨年度の調査結果から検討し、新に調査項目をつくる。調査内容は別紙調査用紙に示すものである。(28頁)

(2) 団地に居住している子どもには「団地のくらし」、団地外の子には「団地について」の作文課題を与え、クラス担任が全員に課す方法をとる。

(4) 調 査 日 時

1966年12月中旬に質問紙の配布および回収をし、作文

は1967年4月末にかかせた。

3. 結 果

回収率——世帯者住宅戸数829戸のうち、調査当時の空屋および長期留守宅が36戸であった。これらを除いた793戸のうち、729戸の回答を得、回収率は92%である。

(1) 居 住 状 況

1) 居住の移動と居住年数

入居年月日から当団地居住年数を割出し、住宅の構造種別ごとに居住年数をみたものが第1表である。構造の種別1DKとは、1居室とダイニングキッチンであり、2DKは居室2とダイニングキッチンである。つまり、部屋数の多少（住宅の広さ）をあらわしている。

1DKでは、居住年数1年が26.5%、1年未満が18.6%で1、2位を占めている。2DKでは9年（創設当時入居者）が43.4%、8年が15.4%で1位と2位を占める。1DKは2年未満が半数以上の57%を占め、2DKは8年以上が59%と逆に半数以上を占めている。

創設時期からの移動率をみても、1DKは92%と大部分のものは移動しているが、2DKでは41%の移動である。なお、移動率は、居住8年以上を除いたものの全体との割合である。創設（時期の入居者がつぎの年に渡ったものもあるため、8年以上は一応創設時期に入居したものとした。）

2) 居住人数

一世帯の人数は、第2表に示すように、1名から7名にわたっている。1DKは、2人と3人居住が相半ばしており、2DKでは4人住いが41%、3人住いが32%で、3人と4人で70%を占めている。3DKは4人住いが半分近く45%を占めている。

この一世帯居住人数の平均をみると第3表のようになり、1DKは2.5人、2DKは3.5人、3DKは3.8人となっている。この居住人数を、昨年度調査した設立後1年の藤沢団地と比較してみる（おなじく第3表）と、1DKでは当団地より藤沢団地の方が人数が多く、3DKでは逆に藤沢団地の方が人数が少なくなっており、全体の平均では当団地の方が人数が幾分多くなっている。両団地の平均はそれぞれさほどのちがいはみられないが、当団地の2DK、3DKの標準偏差は藤沢団地のそれより約倍近くになっている。すなわち、さきに移動率で示したように1DKは古い団地でも、2～3年の居住が多

内藤他：団地（密集家庭）における母子保健の研究（第3報）

第1表 居住年数
Table 1 Year of Residence

種別 Housing Classification		1 DK	2 DK	3 DK	計
居住年数 Year of Residence					
1年未満 Under 1 yr.		19 (18.6)%	36 (6.5)%	%	55 (8.2)%
1	年	27 (26.5)	40 (7.2)		67 (10.0)
2	年	12 (11.8)	24 (4.3)		36 (5.4)
3	年	14 (13.7)	20 (3.6)	1 (9.1)	35 (5.3)
4	年	11 (10.8)	15 (2.7)		26 (3.9)
5	年	6 (5.9)	28 (5.1)		34 (5.1)
6	年	3 (2.9)	33 (6.0)	1 (9.1)	37 (5.6)
7	年	2 (2.0)	32 (5.8)	1 (9.1)	35 (5.3)
8	年	5 (4.9)	85 (15.4)	1 (9.1)	91 (13.7)
9	年	3 (2.9)	240 (43.4)	7 (63.6)	250 (37.5)
計		102 (100.0)	553 (100.0)	11 (100.0)	666 (100.0)
移動率 Movement Percentage		92.2%	41.2%	27.3%	48.8%

第2表 居住人数
Table 2 Number of People in a Family

人数 Number		1	2	3	4	5	6	7	計
広さ Dimensions of a House									
1 D K	(%)	0 (51.0)	50 (47.0)	46 (27.3)	2 (2.0)	0	0	0	98 (100)
2 D K	(%)	3 (0.6)	85 (16.0)	168 (31.6)	219 (41.1)	48 (9.0)	8 (1.5)	1 (0.2)	532 (100)
3 D K	(%)	0	1 (9.1)	3 (27.3)	5 (45.4)	1 (9.1)	1 (9.1)	0	11 (100)
計	(%)	3 (0.5)	136 (21.2)	217 (33.9)	226 (35.2)	49 (7.6)	9 (1.4)	1 (0.2)	641 (100)

第3表 居住人数平均（新・旧団地比較）
Table 3 Average Number of a Family (Comparison of New and Old Danchi)

団地 Danchi	広さ Dimensions 人数 Number			1 D K			2 D K			3 D K			計		
	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD
緑町(旧)(old)	98	2.51	0.54	532	3.47	1.46	11	3.82	1.03	641	3.33	0.96			
藤沢(新)(new)	315	2.83	0.63	580	3.34	0.85	26	3.69	0.46	928	3.17	0.82			

旧団地—設立後9年
Old Danchi—Established 9 yrs. ago

新団地—設立後1年
New Danchi—Established 1 yr. ago

いのであり、ながく住むほど人数の偏りは多くなっているといえる。

3) 世帯主および居住者の年齢

世帯主の平均年齢は39.0歳であり、設立後1年の藤沢団地34.5歳と対照すると、5歳ほど高齢になっている(第4表)。住居の広さ別にみると第5表に示すように、居住が広いほど、世帯主の年齢は高くなっている。

つぎに、居住者全体の年齢分布をみている。5歳階級別に年齢分布率(実数は繁雑になるため省略)を、全国と新団地(藤沢団地)と対照して示したのが第6表、第1図である。これで見ると明らかなように、団地は、全国の年齢層とは大分ことなり、偏った分布となっている。

全国的には、いわゆる戦後のベビーブームといわれた現在15歳から20歳代がもっとも高い率をしめしているのに、団地では、この年代層は4%にも満たず、新しい団地では1%にすぎない。新しい団地では、0歳から4歳まで25.3%、30歳から34歳が25.0%と、この二つの年代層で半数以上になっており、極端な団地的偏りをみせている。9年経た団地では、新団地の二つのピークをなす年齢層のそれぞれひとつ上の段階と二分しながら、やはり二つの山をつくっている。つまり、10歳以下の子ども30%、30歳から39歳33%で全体の63%を占める。団地の年齢分布は特殊であり、ひとつは青少年と45歳以上の高齢者がぎわめて少ないこと、ふたつには団地設立後、年を経るごとに年齢層が上昇していくことが特徴といえる。

4) 家族構成および子ども数

家族構成を、「単身者」「夫婦」「親子」「祖父母と同居」「その他」の五つの家族形態に分け、住居の広さ別に集計したのが第7表である。親子の世帯がもっとも多く、1DK60%、2DK80%、3DK90%となっている。夫婦の家族は、1DKでは34%であるが、2DK、3DKでは10%前後である。また、祖父母同居の家族は

第4表 世帯主平均年齢
Table 4 Average Age of the Head of the Household

団地 Danchi	N	M	SD
緑町(旧) (old)	624	39.03	8.90
藤沢(新) (new)	918	34.51	6.94

第6表 5歳階級別 年齢分布率%
Table 6 Age Distribution (every 5 years)

年齢 Age	全 国 Whole Country	旧団地 Old Danchi	新団地 New Danchi
0~4	8.08	14.78	25.33
5~9	7.86	13.92	6.41
10~14	8.82	4.10	1.88
15~19	11.55	3.67	1.02
20~24	8.72	4.01	3.24
25~29	8.57	8.87	20.56
30~34	8.44	16.83	25.03
35~39	7.74	16.02	9.82
40~44	6.39	7.77	2.93
45~49	5.02	3.15	0.85
50~54	4.76	1.91	0.82
55~59	4.20	1.53	0.68
60~64	3.36	1.48	0.44
65~69	2.69	1.10	0.41
70~74	1.85	0.43	0.10
75~79	1.14	0.24	0.07
80~84	0.54	0.14	0.07
85~	0.27	0.05	0
計 Total	100.00	100.00	100.00
(総人数)	98,274,961	2,097	2,923

※全国—1966年10月1日厚生省人口動態統計による推計人口より算出
Computid according to Vital Statistics by Ministry of Health & Welfare as of Oct. 1, 1966

第5表 世帯主年齢層
Table 5 Age of the Head of the Household

年代 Age		20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代	計 Total
広さ Dimensions	Dimensions							
緑町 団地 (旧) (old)	1 D K	41 (44.6)	45 (48.9)	5 (5.4)	1 (1.1)	0	0	92 (100)
	2 D K	33 (6.4)	313 (60.3)	116 (22.4)	33 (6.4)	20 (3.9)	3 (0.6)	518 (100)
	3 D K	1 (7.7)	1 (7.7)	4 (30.8)	3 (23.0)	4 (30.8)	0	13 (100)
	計 Total	75 (12.0)	359 (57.6)	125 (20.1)	37 (5.9)	24 (3.9)	3 (0.5)	623 (100)
藤沢 団地 (新) (new)	1 D K	90 (28.6)	210 (66.6)	11 (3.5)	3 (1.0)	0	1 (0.3)	315 (100)
	2 D K	98 (17.0)	396 (68.6)	59 (10.2)	15 (2.6)	9 (1.6)	0	577 (100)
	3 D K	1 (3.9)	22 (84.5)	0	2 (7.7)	1 (3.9)	0	26 (100)
	計 Total	189 (20.6)	628 (68.4)	70 (7.6)	20 (2.2)	10 (1.1)	1 (0.1)	918 (100)

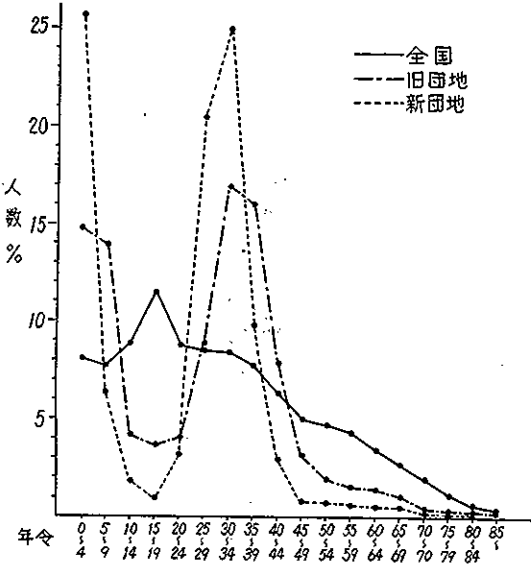
全体でわずかに3%にすぎない。

家族構成について、団地の特殊性をみるために全国と比較してみると第8表、第2図になる。これによると、全国分布とは傾向が異なり、当団地と対照群藤沢団地は

傾向が類似して、団地世帯の特徴をみることができる。団地は、全国より世帯が5%ほど多くなっており、祖父母と同居家族は全国では24%であるのにひきかえ、団地はその8分の1の3%とひどく少なくなっている。

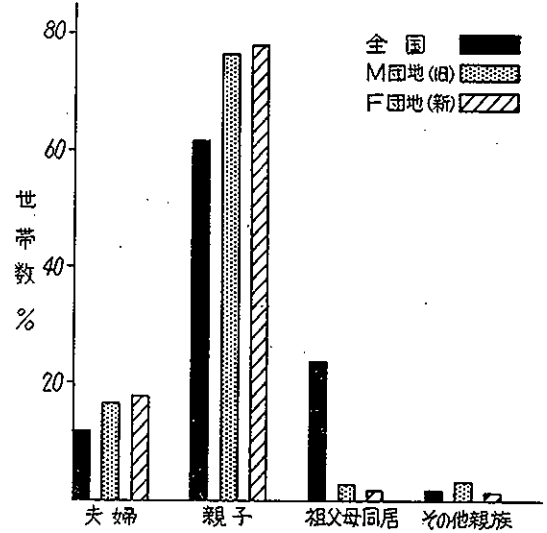
第1図 5歳階級別年齢分布（率）

Fig. 1 Age Distribution (every 5 years)



第2図 家族構成

Fig. 2 Family Construction



第7表 家族構成
Table 7 Family Construction

広さ Dimensions	単身 Single	夫婦 Couple	親子 Parents and Children	三世帯 3 generations	その他 Others	計 Total
1 D K %	0	33 (33.7)	57 (58.1)	0	8 (8.2)	98 (100.0)
2 D K %	3 (0.6)	69 (18.0)	423 (79.7)	21 (3.9)	15 (2.8)	531 (100.0)
3 D K %	0	1 (9.0)	10 (91.0)	0	0	11 (100.0)
計 Total	3 (0.5)	103 (16.1)	490 (76.6)	21 (3.3)	23 (3.0)	640 (100.0)

第8表 家族構成
Table 8 Family Construction

家族形態 Status of a Family	全国親族世帯 Lineal Household in the Country	緑町団地 Old Danchi	藤沢団地 New Danchi
一世代 One Generation	2,529,000 (11.92%)	106 (16.57%)	164 (17.73%)
二世代 2 generations	13,073,600 (61.60%)	490 (76.59%)	722 (78.05%)
三世代 3 generations	5,159,900 (24.31%)	21 (3.28%)	22 (2.38%)
その他親族 Others	460,400 (2.17%)	23 (3.59%)	17 (1.84%)
計 Total	21,222,900 (100.00%)	640 (100.00%)	925 (100.00%)

※全国親族世帯——1966年10月1日厚生省人口動態統計

つぎに、一世帯の子ども数を見る。親子世帯であっても、成人とその親の家族もあり、このばあいには、結婚や独立してすでに別居している子どももあるので、第1子が20歳未満の子どもの数をしらべた(第9表)。子ども1人か2人の家族が多く、4人子どものいる家族は2世帯だけである。現在、日本の平均子ども数は2.62人(人口問題研究所第4次出産力調査、1962年、妻50才未満の子どものある家庭の平均子ども数)であり、団地は1.59人で、全国より平均で1.03人低くなっている。

(2) 団地生活と子どものしつけ

質問項目のAとして、団地生活のために子どものしつけ上、よい点と困る点についてたずねた。よい点、困る点それぞれを、イ、「ある」ロ、「ない」ハ、「わからない」の選択肢をチェックし、その理由を3つづつあげさせる。しつけ上の問題は子どもの年齢段階によって異なるので、質問紙にあるように、「乳児期」「幼児期」「小学校時代」「中学校時代」「高校時代」の5段階について、別々に回答をうるようにした。

1) しつけ上良い点と困る点

第1子が20歳以下の母親450名を100として、回答率を見ると、第10表の右に示すようになる。乳児と幼児期については80%近く回答しているが、小学生は半分の40%、中学と高校は10%前後の回答率である。小さい子どもをもつ母親が多いだけに、これも当然といえよう。子ども

第9表 子どもの数

Table 9 Number of Children

子 ども 数 No. of Children	世 帯 (%) Household	
な し None	103 (17.1)	
第 1 子 21 歳 以 上 1st child over 21 yrs. old	46 (7.7)	
第 1 子 20 歳 以 下 1st child under 20yrs. old	1人	209 (34.8)
	2人	204 (33.9)
	3人	37 (6.2)
	4人	2 (0.3)
計 Total	601 (100.0)	
第1子20歳以下の子ども数の平均 1.59人		

の養育上団地生活が良い点があるというものと困る点があるというものを、第10、第11表から検討してみると、第3図のように、乳幼児期は良い点あるというものの方が多く、小学校はやや良い点の方が多く、中高校時代は悪い点をあげるものが多くなっている。

2) 良い点と困る点の内容

どんなことが良い点、困る点であるか、記述された回答を、環境、設備、集団生活(対人関係)、家庭生活に

第10表 しつけ上のよい点

Table 10 Good Points for Upbringing

	あ Yes	な No	わ かり ない No Opinion	計 Total	回 答 率 Percentage of Answers
乳 児 Babies	189(54.2%)	73(20.9%)	87(24.9%)	349 (100%)	77.2%
幼 児 Infants	268(77.3%)	40(11.5%)	39(11.2%)	347 (100%)	76.7%
小 学 生 Primary School	113(62.8%)	28(15.5%)	39(21.7%)	180 (100%)	39.8%
中 学 生 Lower Secondary	13(25.0%)	14(26.9%)	25(48.1%)	52 (100%)	11.5%
高 校 生 Upper Secondary	9(21.4%)	12(28.6%)	21(50.0%)	42 (100%)	9.3%

N=452

分けて集計した。「環境」は当団地の立地条件を主としたもの、「設備」は団地の設備条件を主としたものであり、ともに設立する側の問題といえる。一方、居住するものの住まい方の問題として、「集団生活」と「家庭生活」にわけてみた。第12表~第21表が、各年齢段階別に示したものである。表の右に示す百分率は、良い点があ

る。あるいは困る点があると答えた人数(各表下欄のN)を100とした割合である。

1) 乳児期(第12・13表)は、良い点は設備45%、集団生活41%、環境28%、家庭生活21%の順にあげられている。困る点は、設備69%に集中し、つぎに家庭生活33% 集団生活24%で、環境は2%にすぎない。環境は当団地

第11表 しつけ上の困る点

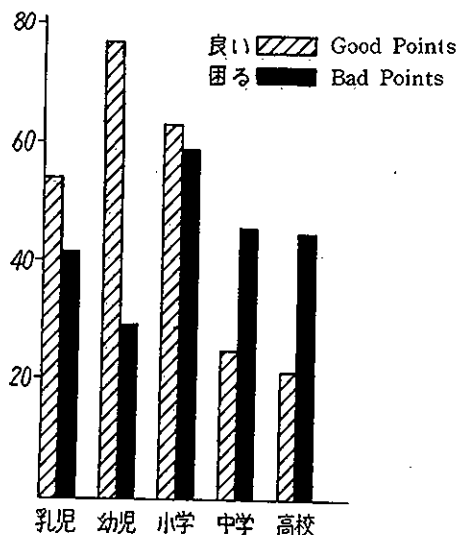
Table 11 Bad Points for Upbringing

	あ Yes	な No	し わからない No Opinion	計 Total	回答率 Percentage of Answers
乳 児 Babies	132(41.5%)	110(34.6%)	76(23.9%)	318 (100%)	70.4%
幼 児 Infants	218(29.2%)	65(20.6%)	32(10.2%)	315 (100%)	69.7%
小 学 生 Primary School	100(59.2%)	40(23.7%)	29(17.1%)	169 (100%)	37.4%
中 学 生 Lower Secondary	28(45.9%)	11(18.0%)	22(36.1%)	61 (100%)	13.5%
高 校 生 Upper Secondary	24(44.5%)	10(18.5%)	20(37.0%)	54 (100%)	11.9%

N = 452

第3図 しつけ上の良い点、困る点

Fig. 3



はよいといえる。室内の設備は、せまい、騒音、危険などの問題がある一方、設備よく便利、衛生的、室内の温度調節が木造家屋よりよい、閉めると騒音入らず静かであることが良い点としてあげられている。屋外の設備は遊園地があり危険がないことが良い点であり、遊具置場のないこと、芝生に入れないことが難点となっている。集団生活としては、母親同志の育児にたいする相談や助けあいのできる、同じ年齢の子が多く比較できること、集会所利用の健康相談があること、友だちが多いことが良い点であるが、他の子と比較してあせること、病気の感染しやすいことが困る点としてあげられている。家庭内生活では、子どもが泣いても外に響かず気がねのないこと、目がとどくこと、同居人がなく規律あ

第12表 乳児期良い点

Table 12 Good Points for upbringing up Babies

環 境 Environment	環境よい		14	53(28.0)%
	日当たりよい		28	
	空気よい		11	
設 備 Facilities	室 内 Indoor	設備よい	14	52(27.5)
		衛生的	12	
		温度調節	13	
		静か	13	
	屋 外 Outdoor	あそび場	21	33(17.5)
		危険なし	12	
集 団 生 活 Group Life	母 親 Mother	育児相談 健康診断	17	60(31.7)
		母同志話しあ い	36	
		他の子と比較 できる	7	
	子 ども Child	友だち多い	18	18(9.5)
家 庭 生 活 Family Life	泣いても気が ねない		9	39(20.6)
	目がとどく		9	
	合理的な生活		8	
	安心して外出 できる		7	
	トイレのしつ け		4	
	他人たちいら ない		2	
そ の 他 Others			6	6(3.2)

N = 189

第13表 乳児期困る点
Table 13 Bad Points for bringing up Babies

環 境 Environment		保育所ない	1	%	
		自然に親しめない	2		3(2.3)
設 備 Facilities	室 内 Indoor	非衛生(湿気、ほこり、温度)	7	84(63.6)	
		外気浴できない	4		
		もの干場他不便	5		
		せまい	16		
		外からの騒音	11		
		ドア、プザー、段階の騒音	14		
		ベランダ階段危険	13		
		4・5階 危険不便	14		
	屋 外 Outdoor	遊具置場ない	3	7(5.3)	
		芝生立入禁止	4		
	集団生活 Group Life	母 親 Mother	他の子と比較する	16	21(15.9)
			相談相手ない	2	
			近所わづらわしい	2	
			他の家とのしつけの差	1	
子 ども Child		病気感染	6	10(7.6)	
		他の子のものほしがる	3		
	他の家に上りこむ	1			
家 庭 生 活 Family Life	泣くと気がね		20	39(29.5)	
	せまいのでおとなの生活とけじめつかない		9		
	せまいため叱ること多い		6		
	かまいすぎる		3		
	年寄がいない		1		
そ の 他		1	1(0.8)		

N=132

るしつけができる、安心して外出できる、トイレのしつけがしやすいなどが育児しやすい点になっている。一方、泣くと近所に気兼ねするものも多く(ドア、窓を開けておく-夏場)、せまいために親の生活時間に乳児が左右されてしまう。やはりせまいため危険なこと多く禁止することが多すぎるのが困ることとなっている。

2) 幼児期についてみると(第14・15表)、良い点は

設備74%、集団生活78%で、それぞれ屋外の設備と子どもの集団生活が大部分を占めている。困る点は、せまい、4~5階が危険、不便である、階下に音がひびくので子どもを叱ることが多いなど室内設備が多くなっている。また、他の子と比較してしまうこと、母親同志の関係のむづかしさ、他の家とのしつけのちがいがいなど、乳児期の母親同志のばあいより困る点が多くなっているのが

第14表 幼児期良い点
Table 14 Good Points for bringing up Infants

環 境 Environment		環境よい	6	%	
		日当たりよい	4		13(4.9)
		空気よい	3		
設 備 Facilities	室 内 Indoor	設備よい	4	11(4.1)	
		衛生的	7		
	屋 外 Outdoor	あそび場	148	187(69.8)	
		危険なし	39		
集団生活 Group Life	母 親 Mother	健康診断	2	23(8.6)	
		母親同志の話しあい	16		
		他の子と比較できる	5		
	子 ども Child	幼児グループ	5	185(69.0)	
		友だち多い	139		
		社会性のびる	27		
公德心そだつ		12			
		競争心がある	2		
家 庭 生 活 Family Life	合理的な生活		3	17(6.3)	
	トイレのしつけ		7		
	目がとどく		3		
	留守番		3		
	泣いても気がねない		1		
そ の 他 Others		1	1(0.4)		

N=268

目立っている。子ども同志のばあいは、友だちが多いという良い点がある一方、他人のものをほしがる、まねする、友だちからの影響、子ども同志の互いの家の出入りが多いなど問題も多くなっている。家庭生活ではせまいためのしつけの困難や子どもの性格に与える影響、

第15表 幼児期困る点

Table 15 Bad Points for bringing up Infants

環 境 Environment		自然に親しめない	2	%		
		幼稚園がない	1		3(1.4)	
設 備 Facilities	室 内 Indoor	せまい	32	114(52.3)		
		4・5階 危険不便	29			
		階下にひびく	28			
		危 険	20			
		外からの騒音	5			
	屋 外 Outdoor	遊具置場なし	2	14(6.4)		
		庭なし	11			
		戸外トイレなし	1			
	母 親 Mother	他の子と比較		20	48(22.0)	
			親同志の関係	17		
他の家とのしつけの差			11			
		他の子の模倣	37	89(40.8)		
子 ども Child	友だちの影響	19				
	病気感染	7				
	友だち多すぎる	6				
	他家との出入り	12				
	友だち関係	8				
	動物がかえない	5				
家 庭 生 活 Family Life	せまくておとなの生活とのけじめなし		6	26(11.9)		
		せまいので性格小じんまり	6			
	せまいので落着なし	4				
	目につきすぎる	3				
	年寄がいない	1				
	カギをあけて出る	1				
	動物がかえない	5				
	そ の 他 Others				5	5(2.3)

N=218

動物がかえないことが困る点として指摘されている。

3) 小学校時代は、第16・17表にみるように、設備については、室内・屋外とも良い点が幼児期の74%より28%と少なくなっており、困る点は室内は20%で幼児期52%より半分以下になっているが、屋外施設はあそび場がな

第16表 小学校時代良い点

Table 16 Good Points for bringing up Primary School Children

環 境 Environment		環境よい	3	%	
		学校近い	4		8(7.1)
		空気よい	1		
設 備 Facilities	室 内 Indoor	衛生的	1	2(1.8)	
		子ども部屋とれる	1		
	屋 外 Outdoor	あそび場	19	29(25.7)	
		危険ない	10		
集 団 生 活 Group Life	母 親 Mother	生活水準同じ	8	24(21.2)	
		親同志の相談	7		
		連絡とりやすい	6		
		他の子と比較できる	3		
	子 ども Child	サークル・けいこごと	6	93(82.3)	
		友だち多い	66		
		社会性がのびる	8		
		競争心がある	8		
		注意しあう	8		
		公德心そだつ	2		
家 庭 生 活 Family Life	留守番させられる	6	15(13.3)		
	合理的な生活	3			
	清潔のしつけ	3			
	片づける	2			
	手伝いする	1			

N=113

いということ幼児期の6%にくらべ小学校は15%になっている。母親同志の点では、生活水準が同じ、お互いに相談、連絡しやすいなどを合せて21%、乳児期の32%には及ばないが、幼児期の9%よりはぐんと多い。子どもの集団生活のよさは、友だちが多い、また社会性がのびるなどであり、他の年齢段階と比べてももっとも高く、82%を占めている。しかし、友だちが多すぎて勉強しないであそびすぎる、他の子の模倣をするなど、子ども同志の困った点として37%あげられている。家庭生活でみると、留守番や合理的な生活をさせられるなどの良い点があげられ、困ることは子ども部屋がとれないこと、せまいためのびのび育てられないことなど、動物がかえない

第17表 小学校時代困る点

Table 17 Bad Points for bringing up Primary School Children

環境 Environment		自然に親しめない	1	1(1.0)
設備 Facilities	室内 Indoor	せまい	14	20(20.0)
		外からの騒音	3	
		階下にひびく	3	
	屋外 Outdoor	あそび場なし	11	
		庭なし	2	15(15.0)
		自転車おき場なし	2	
集団生活 Group Life	母親 Mother	他の子と比較	16	20(20.0)
		他の家とのしつけの差	4	
	子ども Child	他の子の模倣	10	37(37.0)
		競争心	6	
		友だち少ない	5	
		友だち多すぎ	12	
		友だちの影響	1	
		子どもの集り派手	2	
		病気感染	1	
		家庭生活 Family Life	動物かえない	
個室とれない	29			
せまくて落着きない	8			
せまくてのびのびしない	8			
せまくて手伝いさせられない	3			
せまくて目がとどきすぎ	1			
その他 Others			4	4(4.0)

N=100

いということの他は、すべてせまいために起る問題として回答者の55%がとりあげている。

4) 中学校時代、高校時代は回答数が少ないのであるが、数年先きに、この年代の子たちが多くなることを考えると少数の意見も貴重である。第18表~第21表にみるように、環境は、困る点はでていない。設備は、せまいこと、屋外に青少年のための施設がないこと、が困る点としてあげられている。友だちの少ないことは良い点にも困る点にもあげられている。家庭生活では、せまいために起ってくるもの(個室がとれない、親の生活と密着しすぎる、のびのび育てられない、家事の手伝いを通し

第18表 中学校時代良い点

Table 18 Good Points for bringing up Children attending Lower Secondary School

環境 Environment	環境よい	2	6(46.2)	
	繁華街遠い	2		
	学校近い	2		
設備 Facilities	あそび場	1	1(7.7)	
集団生活 Group Life	母親 Mother	生活水準同じ	1	1(7.7)
		子ども Child	サークル活動	1
	友だちがある		4	
	社会性		2	
	公徳心		1	
	互いに注意しあう	1		
家庭生活 Family Life	勉強できる	1	3(23.1)	
	目がとどく	1		
	留守番	1		

N=13

第19表 中学校時代困る点

Table 19 Bad Points for bringing up Children attending Lower Secondary School

設備 Facilities	室内 Indoor	せまい	6	6(21.4)
	屋外 Outdoor	青少年の設備なし	5	5(17.9)
集団生活 Group Life	母親 Mother	対人関係わづらわしい	2	2(7.1)
		子ども Child	友だちいない	4
	集りが派手		2	
		競争心	1	
家庭生活 Family Life	動物かえない	1	23(82.1)	
	個室とれない	11		
	親とフスマごしの寝室	4		
	せまいので落着きない	3		
	せまいのでのびのびしない	2		
	せまいので家事手伝いさせられない	2		
その他 Others		1	1(3.6)	

N=28

て勤労意欲を育てることができないなど)に集中している。中学以上では、せまいことのほかに、屋内の構造も

第20表 高校時代良い点
Table 20 Good Points for bringing up Children attending Upper Secondary School

環 境	環境よい	1	1(11.1)	
設 備	あそび場	1	1(11.1)	
集 団 生 活 Group Life	母 親 Mother	互いに相談	1(11.1)	
	子 ども Child	友だち少い	2	
		友だち多い	1	4(44.4)
		社会性	1	
家 庭 生 活 Family Life	独立意識もつ	2	3(33.3)	
	留守番	1		

N=9

第21表 高校時代困る点
Table 21 Bad Points for bringing up Children attending Upper Secondary School

設 備	室 内	せまい	7	9(37.5)
設 備 Facilities	室 内 Indoor	外からの騒音	1	
		楽器他へひびく	1	
	屋 外 Outdoor	青少年の設備なし	1	1(4.2)
集 団 生 活 Group Life	母 親 Mother	対人関係わづらわしい	1	1(4.2)
	子 ども Child	友だちいない	3	3(12.5)
家 庭 生 活 Family Life		動物かえない	1	19(79.2)
		個室とれない	11	
		親とフスマごしの寝室	6	
		せまいため家事手伝いさせられない	1	
て の 他 Others			1	1(4.2)

N=24

問題になってきている。

3) 居住状況との関係

1) 住居の広さ：戸数の少ない3DKをのぞき、2DKと1DKとを比較する。各年齢別に、しつけ上良い点のあるなし、困る点のあるなし、それぞれについて、住居の広さによる有意差をみることにした。中・高校生は回答が少数なので除き、乳児・幼児・小学校をとりあげることとする。広さとの関係は、つぎに示すように、幼児期の困ることがあるに差がみられ、2DKより1DKに困ることが多かった。

広 さ	乳児期	幼児期	小学校	
1DK:2DK	良い	.70>P>.50	.50>P>.30	.70>P>.50
	困る	.70>P>.50	.10>P>.50	.50>P>.30

2) 居住人数：家族数3人以下と4人以上にわけて、居住人数としつけ上の問題の関係をみると、つぎのようになる。これで見ると、家族数の多少によるしつけ上の問題の差はみられない。

居 住 人 数	乳児期	幼児期	小学生	
~3人:4人~	良い	.30>P>.20	.30>P>.20	.70>P>.50
	困る	.70>P>.50	.30>P>.20	.90>P>.80

3) 居住階数：3階をのぞき、1・2階と4・5階とにわけて、その差を検討してみるとつぎのようになる。

居 住 階 数	乳児期	幼児期	小学生	
1・2階:4・5階	良い	P<.02	P<.05	.30>P>.20
	困る	P<.01	.50>P>.30	P<.05

乳児期では、良いこと、困ること、ともに、4・5階の方が1・2階より有意差をもって多くなっている。良い点は、4・5階の方が静かであること、困る点は危険、外へ出る不便などと考えられる。幼児期は、良い点あるが1・2階に多く、困ることあるが4・5階に多くなっている。とくに良い点では5%の危険率で1・2階の方が良いといえる。これは昨年度の幼児の外あそび調査で、1・2階は早くからつきそいなしに外あそびできる、遊具（三輪車など）の上げ下しに労力がいらぬことなどで、4・5階より外あそびが活発であった結果とみあわせてうなづけることである。小学校では、困る点が5%の危険率で4・5階の方が多いといえる。内容を見ると階下にひびくので必要以上に叱ることが多い、自転車の置場に困るなどが1・2階より多くなっている。

(3) 子どもの性格への影響

1) 性格への影響の有無：団地生活が、子どもの性格形成に影響をあたえると思うかどうかをたづねた。第22表のように、回答のあった466名のうち、194名(41.7%)のものが影響あると答え、182名(39.0%)のものが影響ないと思うと答えている。したがって、性格への影響があると思う母親と、影響ないと思う母親と相半ばしており、わづかに影響あると思う母親が多いといえよう。

2) 居住状況との関係：広さ、居住人数、居住階数、つまり、1DKと2DK、3人以下と4人以上の家族、

第22表 性格への影響

Table 22 Influence on the Character

あ Yes	な No	わ No opinion	計 Total
194	182	90	466
(41.7)%	(36.9)	(19.3)	(100.0)

1・2階と4・5階、それぞれについて、影響の有無の差の検定をおこなったが、いずれも有意な差はない結果となっている。

3) どのような影響をうけるか： 回答を団地のため良い影響をうけるというもの(肯定的なもの)、悪い影響をうけるというもの(否定的なもの)に分類してみた(第22表)。影響あると思うと答えた194名のうち、肯定的な影響は、わづかに28あげられているにすぎないが、

第23表 子どもの性格におよぼす影響

Table 23 Influences on the Children's Characters

肯定的なもの Affirmative	
社会性が育つ	11
協力性にとむ	6
積極的になる	3
競争心が刺激になる	3
忍耐力がある	2
公共物を大切にす	1
足が強くなる	1
知識が豊富になる	1
計	28
否定的なもの Negative	
自然や動物に親しめない	10
運動不足になる	6
のびのびしない、こじんまりする	42
たくましさに欠ける	12
団地っ子、小市民的になる	11
おとなびる	5
団地外に排他的	6
閉鎖的	5
利己的・自己中心的	12
型にはまる、個性がない	36
計	233

第24表 性格への影響

藤沢団地(昨年度)

Table 24 Influence on the Character

(Investigated at New Danchi in 1965)

肯定的なもの Affirmative	%	否定的なもの Negative	%
独立心育つ	17.2	依存的になる	9.4
社会性が育つ	36.5	非社会的になる	6.7
協力性にとむ	13.3	競争心つよい	33.9
開放的になる	8.9	閉鎖的になる	20.1
体力がのびる	13.5	体力おとる	15.9
積極的になる	13.9	消極的になる	10.8
計	N=566	計	N=529

否定的な影響は233もあげられている。

昨年度の藤沢団地でも、性格の影響を調べたが、質問紙にはじめに肯定的・否定的項目12を選択肢として(第24表)、チェックする方法をとった。結果は、第24表のように、団地生活に肯定的な影響をみるものが否定的なものより多くなっている。影響の有無についても、有ると思うが52%、無いが28%で、今回調査の有る42%、無い39%とは大変ちがう結果となっている。この差は緑町団地と藤沢団地の差、あるいは新旧団地の差というより、選択肢を用いると用いないとの差といえる即ち、選択肢を用意しないで自由記述にすると、影響がないと思うものが多くなること、また、影響といえば困る影響のみを考える傾向があることを指摘することができる。

今回は自由記述によるので第23表のように、さまざまな具体的な影響があげられている。のびのびと育たない、個性がない、競争意識がつよいなどが多く、いわゆる「団地っ子」の姿をうきばりにしている。しかし、「団地っ子になる」「型にはまった性格」「利己的」などの答えに伺えるように、なぜそうなるか、どんなことが判然としない。これは、母親自身がマスコミの受け売りをしているからではないかと思われる。

(4) 団地内の交流

1) サークル活動： 団地内では一般家庭とちがってさまざまなサークルやクラブ活動がおこなわれている。その参加度をみると、第25表のように49.5%と半分の所帯は、家族の誰かがサークルに参加している。居住年数が多いほど参加度は多くなり、新しい藤沢団地12.9%と比較すると4倍の参加度となっている。

不参加の理由をみると(第26表)、参加する意志のないもの18%にすぎず、他は入るきっかけのないもの、現在参加できないものとなっている。内容は第27表のよう

第25表 サークル活動
Table 25 Circle Activities

サークル Circle 居住年数 Year of Residence	参 加 Joined	不 参 加 Not joined	不 明 No answer	計 Total
～ 2 年	42 (26.4)	111 (69.8)	6 (3.8)	159 (100.0)
3 ～ 7 年	72 (45.5)	79 (50.0)	7 (4.5)	158 (100.0)
8 年 ～	205 (62.5)	114 (34.6)	9 (2.8)	328 (100.0)
不 明	9 (60.0)	6 (40.0)	0	15 (100.0)
計 Total	328 (49.5)	310 (47.0)	22 (3.5)	660 (100.0)
新 団 地	135 (12.9)	857 (82.2)	51 (4.9)	1,043 (100.0)

第27表 サークル・クラブ活動
Table 27 Circle and Club Activities

夫 Husband	妻 Wife	子 ども Children
卓球、テニス、スキー 12	卓球、テニス、スキー 19	オルガン、バイオリン 26
自動車 38	バレーボール、フォークダンス 18	絵、英語 73
囲 碁 5	自動車 8	バレー 14
カメラ 1	手芸・料理・華道他 44	野球・テニス 10
	共同購入、婦人サークル 39	子ども会 18
計 56	計 128	計 141

第26表 サークル不参加の理由
Table 26 Reasons for not joining
Circle Activities

忙しい	92	135 (43%)
小さい子がいる	40	
病 弱	3	
人間関係わづらわしい	21	59 (18%)
必要なし、興味なし	29	
興味あるものなし	9	
機会がない	91	123 (39%)
とくに理由なし	29	
入居間もない	3	

に、スポーツ、趣味、実益、子どものおけいごと多様
にわたっている。

2) 集りや催しもの： 積極的に出席するもの、あま
り出席しないもの、一度も出席したことのないものにわ

第28表 催しものへの参加
Table 28 Joining the Entertainments

	積 極 的 に Positively	あ ま り 出 席 せ ず Seldom attend	出 席 し た こ と な し Have never attended	無 回 答 No Answer	計 Total
旧団地 (緑町) Old	73 (11.0%)	392 (59.6%)	167 (25.4%)	26 (4.0%)	658 (100%)
新団地 (藤沢) New	150 (14.4%)	612 (58.7%)	176 (16.9%)	105 (10.0%)	1,043 (100%)

けてみると第28表のようにになっている。あまり出席しな
いものが60%を占め、藤沢団地と似た傾向をしめしてい
る。したがってサークルやクラブ活動とちがひ、催しもの
などの一時的な交流については、旧い団地も新しい団
地も変りないといえる。

3) 団地内のつきあい： つきあいの程度を、イ、「団
地内に親戚以上のつきあいがある」ロ、「相手の家にあが
ったり、相手を自宅へ呼んだりつきあいがある」ハ、「つ
きあうがドアの外での交際」ニ、「あいさつ程度のつきあ
いはある」ホ、「団地内のつきあいはない」——以上五つに
わけて、もっとも親しい人のつきあいを基準にチェック
してもらった。第29表がその結果である。お互いに家へあ
がってのつきあいが50.8%で、もっとも多くなっている。

イ、「親戚以上のつきあい」とロ、「互いの家にあが
っての交際」をあわせて交際のあるものとし、他を交際の
ないものとしてみると、子どものある家庭が交際あるグ

ループの80%を占め、子どものない家庭が交際ないグループに多くなっている。また、居住年数でみると、交際あるグループの55%は8年以上居住、2年未満が19%、残りが3~7年居住で27%で、長い居住者ほど団地内のつきあい度は深くなっている。

つきあいのあるなしの二つのグループについて、しつけ上の良い点、困る点の有無、性格への影響の差の検定をしてみるとつぎのようになる。

つきあいのあるグループが、各年齢、良い、困る、影響ともに多くなっており、とくに、幼児期の良い点、困

第29表 団地内のつきあい
Table 29 Companionship in the Danchi

イ、親戚以上のつきあい	64 (8.7%)
ロ、訪問しあう	374 (50.8%)
ハ、ド7の外の交際	106 (14.3%)
ニ、あいさつ程度	182 (24.5%)
ホ、つきあいなし	13 (1.7%)
計	739(100.0%)

つきあい度		乳 児 期	幼 児 期	小 学 校	性 格 へ の 影 響
深 い : 浅 い	(良い)	.10 > P > .05	P < .005	.30 > P > .20	(ある).20 > P > .10
(イ、ロ) (ハ、ニ、ホ)	(困る)	.20 > P > .10	P < .05	P < .05	

る点と小学校の困る点では5%以下の危険率で有意の差となっている。これは、近所つきあいの深い人たちが、つきあいのない人たちより、団地生活にたいして積極的な意見をもっていることを示していると思う。

(6) 将来の住宅計画

1) 将来の住宅計画について、イ、このままずっと住むつもりと ロ、いずれ越したいのどちらかに○印してもらい。その理由と引越し先きについてたずねた。27%のものがこのままずっと住むつもりにチェックしており、70%がいずれ越したい、残り4%が未定と未記入になっている(第30表)。引越し先きは自分の家が66%で大部分を占めるが、30%のものは、他の団地または分譲

第30表 住宅計画
Table 30 Future Residential Plan

イ、このままずっと住む	184 (27.0%)	
ロ、いずれ越したい	469 (68.9%)	
ハ、未記入、未定	28 (4.1%)	
計	681(100.0%)	
引 越 し 先 き Want to move to~	自分の家	229 (66.0%)
	他の団地	30 (8.6%)
	分譲アパート	73 (21.1%)
	未 定	15 (4.3%)
	計	347(100.0%)

アパートで団地生活をのぞんでいる。永住および転居の理由は第31、32表に示すものである。永住理由を記入したものは、転居理由記入者627名の6%(40名)にすぎない。経済的な理由で不本意ながら永住というものが多いためであろう。永住の理由として、カギーつで外出できる、家屋の修理など公団担当で気楽である、家賃が安

第31表 永住理由
Table 31 Reasons for Permanent Residence

子ども成長後夫婦のみになる	9
生活が簡便である	7
住みやすい、気楽である	6
安全、用心がよい	6
交通便利	6
家賃が安い	5
環境よい	1
計	40

第32表 転居理由
Table 32 Reasons for Change of Residence

団地の条件	せますぎる	390
	設備・間取に不満	25
	閉鎖的・息苦しい	8
	階段がづらい	7
	動物をかいたたい	2
441 (70.3)	勤務先・学校に遠い	9
	対人関係	
	社会的信用がない	5
43 (6.9)	人間関係わずらわしい	18
	子どもへの悪影響	20
	所有条件	
95 (15.1)	自分の家をもちたい	41
	庭がほしい	54
生活条件	自分の土地や家がある	13
	両親と同居する	19
	郷里へ帰る	6
	商売をしたい	3
	転勤がある	6
	社宅がある	1
計		627 (100)

い、交通便利であるなどがあげられている。転居理由としては、せますぎるなどの団地の条件が70%、対人関係（社会的地位が上昇すると対面上団地生活ができない、近所の関係がわずらわしい、子どもへの影響）が7%、自分の所有にしたい15%、生活条件が変わるため転居するもの8%となっている。個々の理由をみると「せますぎる」が62%で第1位で全体の半ば以上になり、狭いことが第一の問題となっている。

2) 居住満足度と居住状況

居住満足度として永住希望者と転居希望者の二つのグループに分け、居住の広さ、居住人数、居住階数、居住年数別に検討してみた。居住人数（3人以下と4人以上）居住階数（1・2階と4・5階）では居住満足度に有意の差はみられない。居住年数では、2年未満と3年～7年、8年以上と、長く住んでいるものほど永住希望者が多い。広さでは1DKより2DKのものに、.10>P>.05で居住満足度が高くなっている。

4. 子どもの作文にあらわれた団地

「社会科の時にしらべたら、クラスの3分の2は、団地に住んでることがわかりました」(Y.K) というように、大野田小学校の4年生は緑町団地の子が大ぜいいる。そして、4年生は当団地の年齢と同じ9歳である。「ぼくは一階に住んでいます。…うちの前にかきとびわの木があります。それは、ぼくが赤ちゃんのとき、たねをまいたもので、もういまは、2かいまでのびています。」(H.O) と、樹木の成長ぶりにも子どもたちの団地生活の歴史がうかがえる。かれらは、団地で誕生した子が多く、そのほかの子も「ぼくは生れて21日目に緑町公園に越してきました。」(J.S)。「ぼくは生れてすぐ公園にこしてきて10年になります」(A.H)。「ぼくは、まん1才から、この団地に住んでいます」(K.A) と根

団地 Danci Building	社宅 Company's House for Employess	一般家屋 Ordinary House	計 Total
40	15	52	107
37.4%	14.0%	48.6%	100.0%

っからの「団地っ子」たちである。5年生以上は団地の子どもは数少ない。

われわれは、4年生に「団地の暮らし」について、団地外の子には「団地について」をテーマに作文してもらった。4クラス107名の作文が集り、107名の子は、つぎのように、団地が37.4%、社宅（鉄筋アパート造り）14%、一般家屋48.6%となっている。

このうち、ある1クラスおよび若干名はこちらの指示が徹底せず、自分の一日の行動を書いたため、30名は資料とならなかった。この残る77名のうち、社宅は(20戸、40戸と密集した鉄筋アパート)、団地と一般家屋の中間にあるので除外し、団地30名、一般家屋36名をとりあげ、それぞれの団地についての感想を整理してみた。第33表は団地の望ましい面であり、第34表は団地の困る面である。

紙面も限られており、全体にわたる詳細な分析はできないので、ここでは、団地に住む子どもたちのもっとも切実な訴えをとりあげることにとどめる。

第33表 Table 33

団地でよいこと Good Points of Danchi (Described by children living in Danchi)	団地の子ども (N30)
環境がよい(学校・商店近い)	6
桜や花だんがきれい	4
静か	1
地震・台風に安心	6
便利・くらしやすい・カギひとつで外出用心よい	8
あそぶところがある	6
友だちが多い	6
クラブ活動できるのがよい	2
造りが同じで公平	1
隣があつて淋しくない	1
団地が大好き	5
団地が羨ましい Envyng Danchi (Described by children living in Ordinary Houses)	一般家庭の子ども (N36)
環境(日当り、学校、商店近い)	7
桜や花だんがきれい	3
外観きれい、道路が補装してある	5
静か	4
地震・台風・火事に安心	7
便利(水洗トイレ他)	12
カギひとつで外出用心よい	10
あそび場がある	16
友だちが多い	12
父母とつれだつて外出している	2
近所と相談できるのがよい	2
団地にすんでみたい	16

〔せまいこと〕……○内数字は家族人数

「わたしは、生れてから、ずっと団地のせいかつをしていましたが、いちばんいやなのは、せまいからです」(A.B④)、「でも、ひとつこまることは、せまいからです」(H.H④)と、殆どの子が「せまいこと」を困ること

第34表
Table 34 Unfavorable Points of Danchi

困っていること 団地の子ども (N30) (Described by children living in Danchi)	
せまい、部屋がほしい	29
庭、あそび場がない	14
動物をかえない	13
物音えんりょする	4
火事の時逃げ場がない	1
階段が大へんである	2
設備(天井ひくい他)がわるい	3
1階は不用心、蟻、ハエ多い	4
広い家にすみたい	13
ふつうの家にすみたい	6
一戸建の鉄筋にすみたい	2
団地でいやなこと 一般家庭の子ども (N36) (Described by children living in Ordinary Houses)	
せまい	23
庭、あそび場がない	20
動物をかえない	6
物音えんりょする	4
火事が心配	5
階段が大へんである	7
同じ造りで間違えそう	4
同じ造りでつまらない	-
箱の中にいるよう	1
団地に住みたくない	7

の第一にとりあげている。

「かく《家具》がもう少し少なくなるとよい。家の中でのかくのたいしょう《大将?対象?》はピアノです。」(T. I③)、「せまくつまらない。うちはとてもせまくかんじる。ピアノやたん《く》さんあるからです」(C. S②)、「四じょう半は本ばこやつくえやダンスがある。六じょうには、テレビ、ピアノ、ようふくダンスが置いてあって、冬はこたつやるのでせまく感じます」(R. E④)。と、子どもの成長とともに家具もふえ、ますます部屋をせまくしていることを物語っている。また、「ようふくだんすがおけない」(A. B④)など必要な家具がおけないことをあげるものも多い。

「家の中がせまい。気《汽》かん車のルールしくとき、紙ひこうきとばすとき、すもうしてるとき、すぐふすまにぶつかって、あながあく。それでうちのふすまは、いつもつぎはぎだらけ」(J. S④)、「おたんじょうかいに友だちよべない」(B. A④)、「せまいので思うように遊ばせん」(K. A④)、と家であそべないこと

をのべている。また「へや数が少なくて、妹や弟にじゃまされて、勉強が落着いてできないし」(K. S⑥)「勉強していると、弟がじゃまするので、どうものうりつががありません」(H. O④)となげく子、「せまくても自分の部屋がほしい」(N. I③)、「ほくだけの部屋もほしいし」(K. A④)と個室をほしがっている。そして、「広い家に住みたいよ。と思います」(A. H④)、「ぼくは、のびのびした生活がしたい。」(T. K③)と訴えている。

〔庭・あそび場がない〕

「ゆうえん地はあるけれど、すべり台やぶらんこなどあって運動場には使えません。自由に遊べるところがほしい」(J. S)、「小さい時は、遊園地で遊べたけれども、近ごろは、遊ぶ所がなくて、たいくつです」(K. A)、「入ったらいけないしばふなどよりも、あき地がほしい」(T. I)と半数近くのもの、自由にあそべる場所を求めている。4年生では、まだ、「あそび場があっていいなと思う」(N. I)子も数人いるが、年齢が大きくなるにともなって、幼児用のあそび場しかない問題は大きくなると思われる。

〔動物が飼えない〕

先きの「住居がせまい」「あそび場がない」は調査による母親の意見からもうかがえた。しかし、子どもたちの動物を飼いたい欲求は、作文を通してはじめて、これほど多くの子が、これほど強く欲していることを知らされる。「こうだんでは、どう物かかっては、いけないことになっています。どうしてかっちゃいけないのかとぞんねんでした」(A. W)、「動物のきらいな人は、団地にいなければ、いいと、つきづき《つくづく》思う。」(K. K)、「やっぱり一けんの家の方がいい。そしてどうぶつをたくさんかきたい。」(S. S)と半分近くのもが動物が飼えないことを不満としている。

せまいし、動物は飼えないし、(A. H)は「まだまだアパートぐらして、さきが思いやられます」と悲観的であり、(K. K)も「ぼくはこんなくらしがいやになった。おおきな家にすみたいというゆめをぼくは、もっている」という。一方「べんりでくらしやすいので、せまいけどやっぱり団地生活はいいなと思います」(Y. K)。「おかあさんが『広い家に行きたいわね』という、ぼくは『いやだよ』といいます。なかのいい友だちと、わかれわかれになるからです。」(H. H)、「お庭のひろい大きな家がいいなあと思うこともありますが、でもぼくはこの団地はお友だちもたくさんいるし大きいです」(T. Y)、「木ぞうの家は寒くてたまりません。犬はかえないけれども、私は団地は大きいです」(Y. T)と生

活しやすさや友だちとの結びつきから団地に愛着をもっている子どもたちも多い。つぎの（T. I）などは、団地に性があるといっている。「この公団が大きすぎます。私が公団に来たのは生れる前からなので、生れてすぐ公団にいました。朝から晩まで一日の公団の生活のどこかが私にあっていて公団のどこかがすぎな私です」。

5. 総括および考察

団地の子どもの養育上の問題をさぐるため、設立後9年経た団地で調査をおこなった。

1. 居住状況： 1) 2DKでは8年以上住むものが約60%であるが、1DKでは8%にすぎない。1DKは移動がはげしく1～2年で転居するものが多い。2) 一世帯の人数は1名から7名にわたり、平均3.3人である。3) 世帯主の平均年齢は39歳で、昨年度調査した藤沢団地（設立後2年）より5歳ほど高齢になっている。居住者の年齢分布をみると、全国分布と著しいちがいがみられる。すなわち、全国分布で頂点を示す戦後のベビーブームの年齢層15～19歳は、団地では4%に満たず、青少年と45歳以上の高齢者が極めて少ない団地特有の分布を示す。新団地では4歳未満と30代前半、旧団地では10歳未満と30代で居住者の半ばを占め、偏った年齢分布のままに設立後の経過年数とともに年令が上昇していくことを示している。4) 家族構成は親子世帯が多く、祖父母同居者は全国の24%に対し、団地は3%である。平均子ども数は全国2.62人に比し1.59人と非常に少なくなっている。

2. 子どものしつけ上の問題： 乳児期、幼児期、小学校時代、中学時代、高校時代の5つの年令段階別に検討した。しつけ上良い点と困る点について比較すると、乳児期と幼児期は、良い点の方が困る点より多く、小学校はほぼ同じで、中学・高校時代は困る点の方が多くなっている。内容をみると、乳児期は親同志育児について相談しあえること、幼児期はあそび場のあること、小学校時代は友だちが多いことがよい点の1位を占めている。困る点は、乳児期は泣くと近所に気がねなこと、幼児期は友だちのものをほしがること、小学校時代は子どもの部屋がとれないことである。中学・高校時代は個室がとれず、親とふすま越しの寝室であることがあげられている。以上団地生活と子どものしつけを考えると、団地の各戸の構造および広さ、そして、設備が乳幼児に適している、青少年に住みにくい状態であることが明らかである。

3. 性格への影響： 今回調査では、良い影響より悪影響が多くあげられ、昨年度の藤沢団地の結果と相違している。これは新旧団地の差ではなく調査方法のちがいで

よる差といえる（今回は自由記述、昨年度は選択肢チェック）。のびのび育たない、個性がなくなる、競争意識が強くなる、自主性がない、神経質になる、利己的になるなどが多くあげられている。しかし、なぜそうなるかは必ずしも明確でなく、一般にいわれている「団地っ子」のタイプの域を出ていない。これは逆に母親自身がマスキに動かされて子どもを見ているともいえよう。

4. 団地内の交流： 1) サークルやクラブ活動は活発で、居住年数の長いものほど参加度は高く、8年以上のものは63%が参加している。居住年数2年未満のものは新団地と年数は同じであるが参加率は倍になっている。旧団地の方が互いに、協力、共通の場をもとめ、団地集団を積極的に活用して生活しているものが多いといえよう。2) 一時的な催しなどの参加については、旧団地と新団地に差はみられない。3) 団地内のつきあいの程度をみると、親戚以上のつきあいあるもの9%、相手の家へあがったり、自宅へ招いたりするつきあいあるもの51%で、60%のものは団地内に親しい友人をもっている。居住年数の長いものほどつきあいは深くなっている。また、つきあい度の深い人たちほど団地生活にたいして積極的な意見をもっている。

5. 将来の住宅計画： 永住希望者が30%、転居希望者が70%である。転居先きは自分の家66%、他の団地や分譲アパートと団地生活を希望するもの30%となっている。転居の第一の理由は「せますぎる」とである。永住希望者には経済的な事情でやむなく希望せざるを得ないものも含まれる。しかし、他の団地や分譲アパートとなお団地を希望することは、建築構造が改善されれば、なお永住希望者は増えるとも考えられる。

6. 団地で誕生し9歳をむかえた子どもたちは、家がせまくて遊びや勉強が思うようにならない、幼児向きのあそび場しかない、好きな動物が飼えないなどを作文を通して訴えている。一方、乳幼児期からの友だちとの結びつきもつよく、団地で生れ団地で育った子の団地への愛着も強くうかがえる。

6. 結 語

われわれは、一昨年度から継続して団地の研究をおこなってきた。しかし、今回はじめて団地の実態に触れることができた思いがする。10年も経過した団地には、団地は仮の住居でもなければ、孤立した人間の密集体でもないことを知らされるものがある。永住希望者が30%もあり、ここを生れ故郷とする子どもたちも育っている。しかし、現在の団地は、戸内は各部屋独立していない構造であり、戸外の施設も、幼児中心のものである。子ど

団地生活の調査
Questionnaire on Life in Danchi

団地 _____ 号棟 _____ 号 記入者名 _____

家族（居住者をすべて御記入下さい）

記入年月日 昭和 _____ 年 _____ 月 _____ 日

当団地人居年月 昭和 _____ 年 _____ 月

当団地生活 _____ 年 _____ 月経過

種別（○印してください）

1DK、2K、2DK、3K、3DK、

3LK、テラスハウス

氏名	世帯主との関係	男・女	年令	現在の職業または学校・幼稚園

（お子さまのいらっしゃる方は、C.D.の項だけ記入してください）

A. 団地の生活のため、子どものしつけ上「よい点」と「困る点」について、イ、ロ、ハの該当に○印をし、イ、のばあいをもっとよい点（困る点）を三つづつあげてください。（現在大きいお子さんのばあいも、乳児期時代から記入してください。また、例えば乳児期にも幼児期にも同じ点が困る（よい）ときは、どちらの時期にも記入してください。）

(1) 乳児期<0月~12月>

よい点 {
イ、ある…つぎの点がよい 1. _____
ロ、ない 2. _____
ハ、わからない 3. _____

困る点 {
イ、ある…つぎの点が困る 1. _____
ロ、ない 2. _____
ハ、わからない 3. _____

(3) 小学校時代

よい点 {
イ、ある…つぎの点がよい 1. _____
ロ、ない 2. _____
ハ、わからない 3. _____

困る点 {
イ、ある…つぎの点が困る 1. _____
ロ、ない 2. _____
ハ、わからない 3. _____

(2) 幼児期<1才~6才>

よい点 {
イ、ある…つぎの点がよい 1. _____
ロ、ない 2. _____
ハ、わからない 3. _____

困る点 {
イ、ある…つぎの点が困る 1. _____
ロ、ない 2. _____
ハ、わからない 3. _____

(4) 中学校時代

よい点 {
イ、ある…つぎの点がよい 1. _____
ロ、ない 2. _____
ハ、わからない 3. _____

困る点 {
イ、ある…つぎの点が困る 1. _____
ロ、ない 2. _____
ハ、わからない 3. _____

B. 子どもの性格は環境にばかり左右されるわけでは
ありませんが、団地で生活すると、子どもにどんな
影響をあたえると思いますか。

{
イ、影響あると思う…… 1. _____
つぎの傾向があると思う 2. _____
ロ、とくにないと思う 3. _____
ハ、わからない

(5) 高校時代

よい点 {
イ、ある…つぎの点がよい 1. _____
ロ、ない 2. _____
ハ、わからない 3. _____

困る点 {
イ、ある…つぎの点が困る 1. _____
ロ、ない 2. _____
ハ、わからない 3. _____

C. (1) 御家族で団地内のサークルやクラブ活動に入
っていらっしゃる方がいますか。

イ、参加している

記 入 例

主 人	①自治会 ②囲碁会
妻	①婦人サークル
長 男	①絵
長 女	①バレー ②絵

ロ、参加していない

理 由 _____

(2) 団地内での集りや催しものに出席しますか。

イ、積極的に出るようにしている ロ、あまり出席しない ハ、一度も出席したことがない

(3) 団地内での近所づきあいについて (あなたのもっとも親しいつきあいを規準に○印してください)

- イ、団地内に親戚以上の親しいつきあいをしているうちがある
- ロ、相手の家へあがったり、相手を自宅へ呼んだりのつきあいがある
- ハ、つきあうがドアの外での交際
- ニ、あいさつ程度のつきあいはある
- ホ、団地内でつきあいはない

D. 将来の住宅計画について

イ、このままずっと住むつもり

ロ、いずれ越したい

○ その理由 { 1. _____
2. _____
3. _____

○ 引越先き { 1. 年後に他の団地に越したい
2. 年後に分譲住宅に移りたい
3. 年後には自分の家を建てたい

もが年ごとにふえ、年ごとに成長していることを考慮していないのである。せいぜい4・5年さきのことを考えているだけである。永住を希望する居住者との展望の欠如とのギャップ——ここにすべての問題がかかっている

るのではないだろうか。そして、この問題は当然のことながら、わが国の土地や住宅の諸問題ときりはなして解決できるものではないであろう。